

# 産学間の認識共有から実りある議論へ



来るべき社会を支える人材を、産業界と大学が連携して育成していくことを目的として設立された「採用と大学教育の未来に関する産学協議会」において、「Society 5.0 人材育成分科会」は、Society 5.0といわれる社会において求められる人材像を描き、それを育成するための教育について幅広い視点から議論を深め、まとめる役割を担うこととなった。

分科会長として最初に取り組んだのは、言葉の定義を産学間で共有することであった。これまで、同じ言葉でも産業界の方と大学人との間で異なる意味でとらえているのではないかと思うことがあった。

例えば「リベラルアーツ教育」とは、企業のトップの方々の多くは歴史や文学などの知識、いわゆる「教養」を授けることと考えておられるのに対して、現代の大学では、人文学・社会科学・自然科学のどの分野であれ学生が1つの専門分野を深く学ぶとともに、他分

野にも関心を広げ、幅広い知識と深い思考力・判断力を身に付ける教育を指す〔本誌16頁図表2参照〕。分科会の場で初めにキーワードの意味を明確にしたことが、その後の議論における無用の食い違いを防ぎ、産学がお互いに未来志向で協力的に議論を進められた1つの要因であろう。

次に、人材に求められる能力を検討する際には、「どのような時代でも重要な能力」と「特に5～10年先に必須となる能力」とを分けて考えることと、基礎的能力から実践的能力までの「積み上げ」を重視することを意識して議論を進めた。その結果、リテラシー、論理的思考力と規範的判断力、課題発見・解決力、未来社会の構想・設計力、高度専門職に必要な知識と能力という5つの要素を構造的に把握し、それらを磨く教育との関係を明確にすることができた〔本誌14頁図表1参照〕。

その後、2つのタスクフォースにおいて、PBL(Project Based Learning

…課題解決)型教育や社会人リカレント教育の好事例が集められた。分科会やタスクフォースでの議論を通じて、企業の方々は最近の大学におけるさまざまな新しい取り組みについて理解し、大学側もまた企業の現状やニーズについて知ることができたと思う。しかし、PBL型教育にせよ社会人リカレント教育にせよ、Society 5.0で求められるレベルの能力まで身に付けさせるためには、教育の質・量ともに一層の向上が求められる。特に、実践的な課題発見・解決力と未来社会の構想・設計力を磨くPBL型教育においては、産学の協力が不可欠であるとともに、最も実りの期待できる領域でもあり、産学がそれぞれの課題を解決しつつ連携を強化していくことが重要である。

最後に、未来志向で積極的かつ協力的に参加していただいた分科会およびタスクフォースの委員の方々に深く感謝したい。